研究 No. ０５２６

未(非)婚成人と親との同居生活の実態と住要求

ー成人同居期の住まい像を探るー

主査　松原　小夜子*1
委員　室　雅子*2

成人した子と親がともに暮らす「成人同居期」の実態を生活面の自立という視点からとらえるために 4 つの調査を行った。その結果、「生活面の世話」「生活音」の二つが主たる問題であることがわかった。これは、子が 20 代よりも 30 代の場合に一層顕在化し、男性の子では、高齢化する親が、子の生活の世話、生活リズムの違い、生活音に悩み、女性の子では、むしろ親が子を頼りにする様子が浮かび上がった。成人同居期の暮らしには、子・親、男・女ともに生活面の自立能力を身につけ互いに協力共同することが求められ、住まいの点では、子と親の部屋の適度な距離と独立性、防音性能、トイレ・洗面等の複数設置などの工夫が必要である。

キーワード ：1）成人同居，2）シングル化社会，3）住要求，4）生活自立，5）生活依存，6）生活音，7）衣食住教育

THE ACTUAL CONDITION OF THE LIFESTYLE OF UNMARRIED ADULTS WHO RESIDE WITH THEIR PARENT(S)

— Exploration of the Image of Dwelling at this Life-stage —

Ch. Sayoko Matsubara
Mem. Masako Muro

The purpose is to clarify the actual home conditions of the lifestyle of unmarried adults who live with their parent(s) from the viewpoint of self-help in daily life. Four kinds of field surveys were conducted. The results show that there are two major issues; (1) taking care of daily life and (2) noise. These issues are more serious when the unmarried adults are in their 30s rather than 20s. Unmarried male adults bother their parents because the parents tend to take care of him, time schedule differences, and noise. On the contrary, female adults are depended upon by their parents. Two improvements are suggested; one is mutual cooperation between adults and their parents in taking care of daily life and the other is reasonable soundproofing of the house and the suitable independence of their bedroom.

1．はじめに

1.1　研究の目的

近年の日本では、成人した後も親と同居をつづける未婚(あるいは非婚)の若者が増加している。この現象を家族周期に照らして考えた場合、単身期、新婚期、子育て期・子どもの成長期、老夫婦期、二世帯期といった従来の周期に加えて「成人同居期」が実態として生み出されてきたと解することができる。子どもの大学進学時期に相当する 20 歳前後を成人への過渡期とし、大学卒業年齢以降を成人期とみなすならば、個々の家族事情によって同居年数に違いがあるとはいえ、成人同居期は必ずしも短くはなく、一時的状態として見過すことはできない。

子どもの年齢から考えれば、成人同居期は、自立した大人同士の暮らしであると推測されるが、昨今のシングル化社会論によれば、成長期に引き続き、子が親に依存する状況が指摘されている[注1)]。親との同居が続く理由の一つには、住居費が不要であるという経済的利点があるといえ、若者の依存的暮らしを自立的暮らしへと変える方策として、経済面を含め単身居住を促す仕組みをつくることも重要である。同時にいま一つとして、既存の住居資源を最大限生かし、親との同居をむしろ積極的にとらえ、同居しつつ、子、親ともに自立した暮らし方を模索することも、シングル化社会を望ましい方向へと成熟させる上で有効な解決策ではないかと考える。しかし今日の住まいの多くは、成長期の子どもと親との暮らしを前提として作られている場合が多く、成人した子と親との暮らしには必ずしも適合しないとも予測される。

こういった視点から既存の研究をみてみると、子どもの成長期、高齢期や二世帯同居期の研究は数多くなされてきたが、成人した子と親との暮らしや住まいとの関わりを取り上げた研究は、筆者の知る限り行われていない[注2)]。社会学や家族関係学分野のシングル論においても、

*1 椙山女学園大学生活科学部　教授　　*2 椙山女学園大学教育学部　准教授

経済面や心理面の自立については研究がなされているが、住まいの中での暮らしに深く関わり、人間が独り立ちして生きていく上で欠かせない「衣食住の生活面の自立」については詳しくは論じられていない[注3)]。

そこで本研究では、生活面での自立に着目し、成人同居期の暮らしの実態や住生活上の問題点・要望などをとらえるとともに、今後のあり方を模索することをねらいとしたい。

1.2 研究の方法

親と同居する未（非）婚成人およびその親を対象として、以下の各章で取り上げる４つの調査を行い、結果を分析考察する。詳細は各章に譲りたい。

２．親と同居する大学生の生活自立と住要求

2.1 調査の対象と方法

研究の端緒として、自立する大人への過渡期にあると考えられる大学生を対象にアンケート調査を行った。

調査対象は、名古屋市内のＳ女子大学とＤ大学、京都市内のＫ大学の 1～4 年生で、配布・回収数は女子学生 377 人（1 年 157 人, 2 年 89 人, 3 年 85 人, 4 年 46 人）、男子学生 91 人（同 7 人, 45 人, 13 人, 26 人）の計 468 人である。調査時期は 2003 年 7 月と 12 月、主な質問項目は、自室の状況、生活自立、親との共同生活、家族コミュニケーション、間取りや設備との関わりなどである。

2.2 自室の形態と満足度

2.2.1 自室の形態

自室の形態を、「専用個室」「特定目的の個室」「兄弟姉妹との共用室」「部屋のコーナー」の 4 つに分けると、女性 68.7%、男性 64.8%が専用個室であった。就寝のみ、勉強のみなど特定目的の個室も含めると、8 割以上が何らかの形で自室を持っている。

自室に置かれているものでは、男女ともに、机とベッドはほぼ 100%、本棚とエアコン約 8 割、音響機器 8～9 割、パソコン約 5 割である（**図 2-1**）。男女差が大きいものは TV とビデオで、男性の方が多く所有している。

2.2.2 自室の満足度

自室の満足度を「満足」から「不満足」までの 5 段階で問い、これを高・中・低の 3 段階に分けて集計すると、自室に満足している人は、女性 47.7%、男性 46.3%と 5 割弱にとどまった。自室への不満の理由は、「狭さ」(6 割)、「独立していない」「プライバシーがない」(2 割前後)などである（**図 2-2**）。「その他」58 例の理由は、「音が漏れる（電話の声を聞かれるなど）」が 31 例に上った。次いで多いのが、プライバシーや部屋の独立性に関するもので、「鍵がない(5 例)」「襖なので開けられそう(4 例)」「他室への通過点になっている(4 例)」

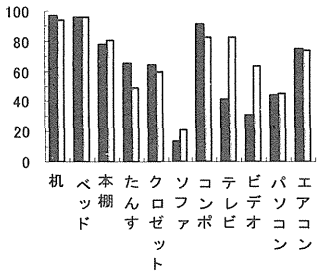

図 2-1 自室にあるモノ

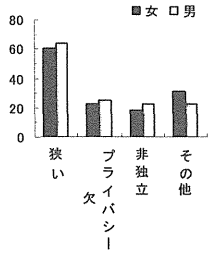

図 2-2 自室不満の理由

「自室のベランダに物干しのために家族が入ってくる(3 例)」「隣がリビングなので干渉される(2 例)」「他の家族のものが置いてある(6 例)」など 27 例である。部屋の設備や環境に関するものでは、「TV が無い(14 例)」が最も多く、「クローゼットがほしい(11 例)」「エアコンがほしい(6 例)」「日当たりや風通しなどの環境がよくない(6 例)」など 45 例であった。

自室の満足度には、部屋の広さ、プラバシーの有無、音漏れの有無、TV の有無などが影響している。

2.3 生活面の自立

生活面の自立全般・起床・自室の掃除・布団管理・衣類管理・食事の準備・食事の片付け・洗濯の 8 項目について、「している」から「していない」までの 5 段階で問い、高・中・低の 3 段階に分けて集計した（**図 2-3**）。

まず「全体として生活面で自立しているか」への意識では、女性は「自立している」と感じている人が 1 割、「していない」が 6 割強を占め、男性では 3 割が自立「している」と感じている。

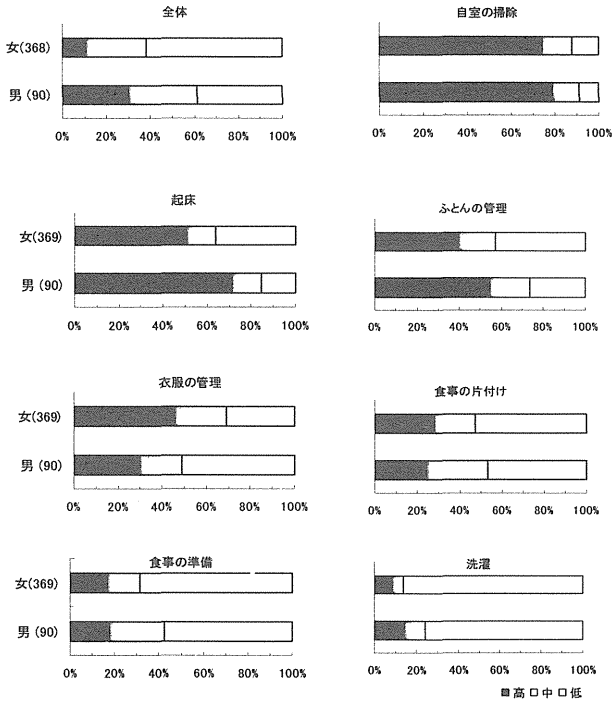

図 2-3 生活面の自立

具体的項目では、「自室の掃除」は男女ともに8割近くと高く、「起床」は男性7割、女性5割、「布団の管理」は同じく5割強と4割、「衣服の管理（洗濯を除く）」は同じく5割と3割である。全般に男性の方が自立度は高いが、衣服の管理だけは女性の方が高い。自立度が低い項目は、「食事の片付け」3割弱、「食事の準備」2割弱、「洗濯」1割前後である。

大学生の生活面での自立の程度は、自室の掃除、起床、布団管理、衣服管理など自室あるいは個人で完結する項目では比較的高いが、食事や洗濯など共同性のあるものは低く、他の家族に依拠している。

2.4 同居生活

2.4.1 同居生活への配慮・協力

同居生活を行う上での配慮や協力については以下の7項目を5段階で問い、決められた家庭内仕事については有無を問うた。

最も配慮している項目は、夜遅く帰ってきたときなどの「生活時間の違いへの気遣い」で、男性9割、女性7割、TVや音響機器などの「音への配慮」は、同7割と6割弱、トイレや風呂を使った後、次の人のためにきれいにするなど「清潔への配慮」は、同6割弱と5割弱がしていると答えている。食事の時間が違うときに「自分で準備する」は、男女ともに5割程度である。

同居生活への協力については、トイレットペーパーやシャンプー等の「補充」や、電球等の「交換」は、男女とも6割程度、物が壊れた時の「修理」は、女性2割、男性5割である。「自室以外の掃除」は男女ともほとんどしていない。「家庭内の決められた仕事」は、男性8割弱、女性7割が「ない」と答えている。

2.4.2 同居生活と間取り・設備

親との同居生活を円滑に行う上で、間取りや設備の点での困り事が「ある」との答えは、女性45.6%、男性52.8%、全体で51.5%である。困り事の中身では「音がもれる・響く」が最も多く、男性6割、女性4割、次いで「収納不足」男性4割、女性3割弱である。「プライバシーが保てない」男女とも2割などである（**図2-4**）。

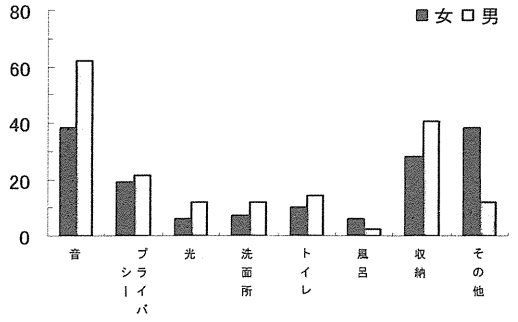

図2-4　同居生活の困り事

「その他」74例の記述をみると、「音がもれる(8例)」「夜に遅く帰ってくると起こしてしまう(5例)」「夜に風呂・トイレの音で気を使う(5例)」など音の問題が19例、「自室が他室やベランダへの通過点になっている(7例)」「部屋がつながっているためプライバシーがない(4例)」「自室が台所や親の寝室の隣なのでプライバシーがない(3例)」などプライバシーに関するもの16例、「収納スペース不足」13例など、全体として、音、プライバシー、収納に関する事項が主である。

2.5 生活の自立度と同居生活への協力度との関係

専用個室の有無、生活の自立度、同居生活への協力度について相互の関係をとらえてみる。

生活の自立度では、尋ねた8項目の平均値（2.91）と標準偏差(0.86）により、低(2.5未満)、中(2.5以上)、高(3.5以上)の3段階を設定し、同居生活への協力度では、尋ねた7項目に「親との共同生活はうまくいっているか」を加えた8項目の平均値（3.43）と標準偏差(0.64）により、低(3.0未満)、中(3.0以上)、高(4.0以上)の3段階を設定した。

まず、専用個室の有無と、自立度および協力度との関わりをとらえてみたが、男女ともに関連は無かった。

次に、自立度別に協力度をみると、男女ともに自立度が高い人は協力度も高く、逆に自立度が低い人は協力度も低い（**図2-5**）。生活の自立度が高く協力もする大学生は、女性で11%、男性で12%にとどまり、生活面では、全般に依存的な姿が浮かびあがった。

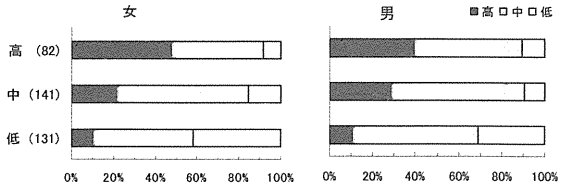

図2-5　自立度別協力度

3．成人と親との同居生活実態と住要求

3.1 調査の対象と方法

前章の結果をふまえつつ、次に、親と同居する成人（大学卒業相当年齢である22才以上とする）およびその親を対象に調査を行った。

調査地域は、1970年代から開発が進み、成人した子が多く居住していると考えられる愛知県春日井市の高蔵寺ニュータウンとした。住宅の間取りが入手でき、かつ住民台帳より親と同居する成人が居住している住戸として、高森台公社住宅73戸、県営高森台住宅85戸、石尾台公社住宅30戸、タウン石尾台172戸の計360世帯を抽出した。各戸を訪問し、子については子の人数分を依

頼し、親については各世帯に1票依頼した結果、子 119 票、親 124 票の有効回答を得た。このうち、子と親が対応しているものが 100 票（10 件は子ども 2 票）、親のみ 24 票、子のみ 9 票である。調査時期は 2004 年 9～10 月、主な質問項目は大学生調査と同様である。

対象とした子の属性は、フルタイムが 7 割強、アルバイト等も含めると約 9 割が有職者で、20 代 83 人(69.7%)、30 代 31 人(26.1%)、40 代 5 人(4.2%)である（**表 3-1**）。親では、母親が 87.1%で、無職が 6 割を占め、年齢は、40 代 6 人(4.8%)、50 代 86 人(69.4%)、60 代以上 32 人(25.8%)である。

表 3-1 対象とした子と親の属性

		フルタイム	アルバイト等	大学院生等	無職	不明	計
女性子	20 代	33	7	2	2		44
	30 代～	12	5		2	1	20
	計	45	12	2	4	1	64
男性子	20 代	26	5	5	3		39
	30 代～	15				1	16
	計	41	5	5	3	1	55
親	母親	8	28		71	1	108
	父親	12(4)			4(1)		16(5)
	計	20	28		75	1	124

（ ）内は母親がいない事例数

3.2 自室の形態と満足度

女性 98.4%、男性 94.4%が専用個室である。大学生調査で男女差の大きかった TV の有無では、女性 57.8%、男性 70.4%と、やはり男性の所有が多い。

自室の満足度では、男性よりも女性の方が高い（**図 3-1**）。不満の理由も、各項目ともに男性の方が多く答えており、最も多いのが「狭い」である（**図 3-2**）。自室の広さは 6 畳が男性 53.7%、女性 46.8%、4.5～5 畳程度が男性 25.9%、女性 29%であり、6 畳を超える広さがほしいとの要望がうかがえる。

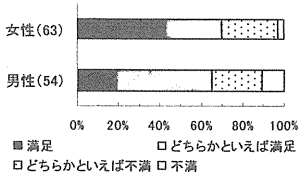

図 3-1 自室の満足度

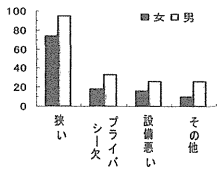

図 3-2 自室不満の理由

3.3 生活の自立度と同居生活への協力度

生活面の自立について、起床・自室の掃除・衣類管理・食事の準備・食事の片付け・洗濯の 6 項目を、「全部自分でする」「自分ですることが多い」「親にしてもらうことが多い」「全部してもらう」の 4 段階で問い、4～1 点の点数を充て、18～24 点を自立度「高」、13～17 点を「中」、6～12 点を「低」とした。自立の程度では男女差はあまりなく、男女ともに 30 代になると自立度の高い人が増え、女性 35%、男性 32%である（**図 3-3**）。

家庭内で協力あるいは分担している家事の有無と自立度との関係をみると、自立度「高」協力「あり」73.3%、自立度「低」協力「あり」17.1%であり、自立度の高い人は家事への協力度も高い（**図 3-4**）。協力している 50 人の協力・分担内容は、食事の支度(43.1%)、買い物(41.2%)、掃除(33.3%)、洗濯(19.6%)などである。

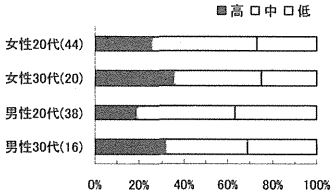

図 3-3 生活の自立度

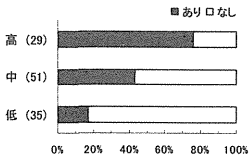

図 3-4 自立度別協力の有無

3.4 独り暮らしへの意識

3.4.1 子と親の意識

男性 20 代の 4 割、30 代の 6 割が独り暮らし（親からの独立を指す）を望んでいる。女性の 30 代では独り暮らしを望む人が少なく、男女差がみられる。親では、「女性の子」よりも「男性の子」、20 代よりも 30 代、成人した子が「1 人」よりも「2 人以上」の場合に「してほしい」という回答が多い（**図 3-5**）。

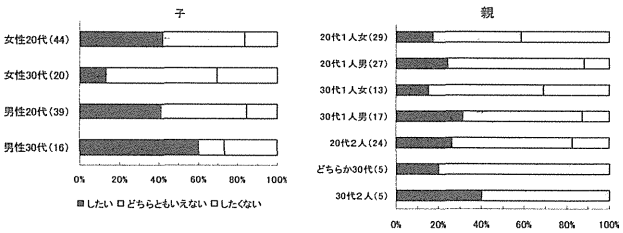

図 3-5 子と親の独り暮らしへの意識

3.4.2 独り暮らしをしない理由

「経済的に余裕がない」「お金を貯めたい」など、経済的理由が主であり、これは男性よりも女性に多い。独り暮らし希望の有無では、「どちらともいえない」「いいえ」では、「独り暮らしをする理由がない」が多く、親との同居生活を当たり前と考えていることがわかる。男性では「生活面の世話をしてもらえる」が 4～5 割あり、依存的傾向が意識の上でもうかがえる（**図 3-6**）。

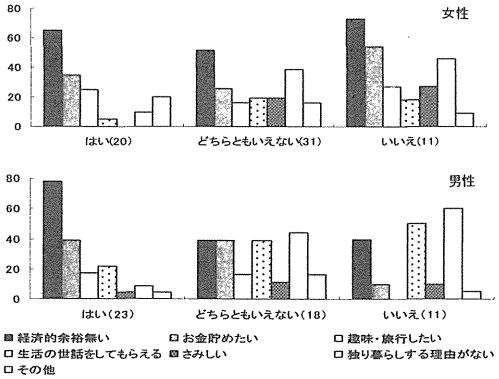

図 3-6 独り暮らし希望有無別の独り暮らしをしない理由

3.4.3 自由記述にみる親の意識

「独り暮らしをしてほしい」親では、意見の記述自体が多かった（**表 3-2**）。いろいろな点で自立を望む声が最も多く、世話が大変なこと、生活することの大切さを知ってほしいなどもある。「どちらでもよい」では、子どもに任せる、経済的に無理などが多く、「してほしくない」では、結婚までは同居でよい、不経済だから、寂しい、一人にするのは不安などである。

表 3-2　独り暮らしについての親の意見

してほしい(28)	どちらでもよい(58)	してほしくない(26)
自立してほしい(16) 世話が大変(4) 生活する大変さを知ってほしい(4) 経済的に自立したら当然だから(2) 干渉してしまうから(1)	子どもに任せる(4) 経済的に無理だから(3) 結婚までは同居でよい(1) 自立してほしいが経済的に負担大きい(1) 夫婦二人より生活に変化があるが世話は面倒(1)	結婚までは同居でよい(4) 不経済だから(2) 寂しくなるから(2) 一人にするのは不安(1) 女性だから(1) 部屋が余っているから(1) 学生時代一人暮らしだったので今は同居がよい(1)

3.5 同居生活の不便な点、気遣う点

3.5.1 不便な点、気遣う点

子の場合、全般に男性よりも女性の方が不便点を多く答えている（**図 3-7**）。「収納不足」が最も多く、女性 7 割、男性 5 割強（親には問うていない）、次いで、子・親ともに、「音が漏れてきて気になる」「音が漏れないように気遣う」など生活音である[注4)]。トイレや風呂、洗面所では「使用時間が重なる」、台所では、狭い・低い・物が多いなど「使用しにくい」が主である。

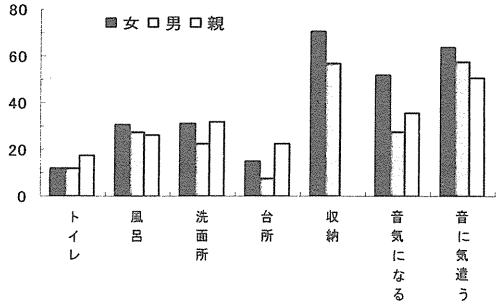

図 3-7　同居生活の不便点・気遣う点

3.5.2 気になる音と気遣う音

女性では「気になる」(51.7%)「気遣う」(63.5%)ともに多く、気になる内容は、TV(44.4%)、話し声(41.4%)、音響機器(29.0%)、夜のトイレ(29.0%)など、気遣う内容は TV(45.0%)、深夜の帰宅(45.0%)、音響機器(35.0%)、話し声(25.0%)などである（**図 3-8**）。男性では「気になる」(27.8%)よりも「気遣う」(57.4%)が多く、気になる内容は、音響機器(40.0%)や TV(53.3%)など、気遣う内容は音響機器(51.6%)、深夜の帰宅(48.4%)、TV(45.2%)などである。

親では「気になる」(35.8%)よりも「気遣う」(50.4%)が多く、気になる内容は、深夜の帰宅(40.5%)、夜のトイレ(31.0%)、音響機器(31.0%)、TV(28.6%)など、気遣う内容は、TV(51.7%)、風呂(33.3%)、音響機器(28.3%)などである。

子・親ともに、音響機器や TV の音が気になり、気遣っている。子は、深夜の帰宅の音を気遣っているが、親は気になっている。自由記述も参考にすると、特に夜遅くの音の問題が大きいといえる（**表 3-3**）。

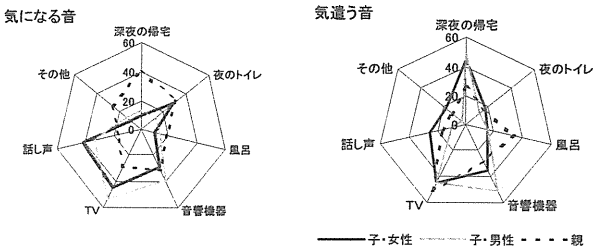

図 3-8　気になる音、気遣う音の種類

表 3-3　音に関する自由記述

〈子の意見〉
夜遅くに2階自室へ階段を上る時の音
毎日深夜帰宅、居間の隣が両親の寝室で、生活音に気を遣う。
〈親の意見〉
足音、布団たたき、物干竿を動かす音
階段の上り下りの音、掃除機の音
夜遅くの電話、夜遅くのＴＶの音
帰宅したときの玄関のドアの音
親の寝室の上に子の部屋あり、足音
子の部屋の近くに浴室あるので、夜遅くなると気を遣う。

3.6 同居生活の満足度

3.6.1 子と親の満足度

子は 6 割程度が満足しているが、男性 30 代では満足度が下がる。親では、子の年代や人数によって満足度が変わる。同居する子が 20 代で 1 人の場合には満足度は高いが、30 代になると満足度は下がり、これは子が男性の場合に大きい。20 代であっても子が 2 人いる場合（3 人は全体で 1 例のみ）、さらに、子が 2 人で、どちらかが 30 代の場合へと満足度は下がる。子が 2 人とも 30 代の場合は、満足との回答は皆無である（**図 3-9**）。

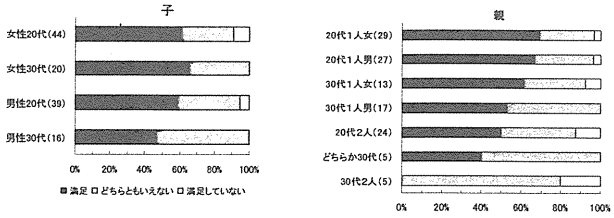

図 3-9 子と親の同居生活の満足度

3.6.2 子の協力と親の満足度

親の満足度と、子の自立度との関係をみると、「満足」の割合は、自立度高(51.9%)、中(57.5%)、低(60.6%)と大きな差はなかった。

次いで、協力の有無（とらえることができる 95 例）と親の満足度との関係をみると、協力ありでは、子の年代や人数にかかわらず満足度は高い（**図 3-10**）。親は子の協力を求めていることがわかる。

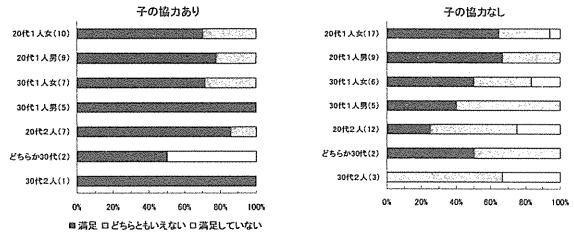

図 3-10　子の協力の有無別満足度

3.6.3 住戸タイプと寝室の位置

対象とした住戸の概要と間取りを**表 3-4**、**図 3-11** に示す。

表 3-4　対象住戸

タイプ	広さ	建て方、階数	個室位置	対象戸数
3K	52 ㎡	集合, フラット		10 (6)
3DK	66 ㎡	集合, フラット		9 (4)
3LDK①	61 ㎡	戸建て, 平屋		7 (3)
3LDK②	73 ㎡	連棟, 2階建て	2階3室	9 (4)
3LDK③	75 ㎡	一戸建て, 2階建て	1階1室、2階2室	6 (3)
4LDK①	99 ㎡	2戸建て, 2階建て	2階4室	28 (23)
4LDK②	105 ㎡	2戸建て, 2階建て	1階3室、2階3室	24 (18)
5LDK	114 ㎡	2戸建て, 3階建て	2階3室、3階2室	16 (12)
増築 4LDK	不明	平屋1戸, 連棟2階建2戸	一戸建て2階建て5戸	9 (5)
増築 5LDK	不明	平屋4戸, 連棟2階建1戸	一戸建て2階建て1戸	6 (3)

（　）内は寝室の位置がわかる事例数

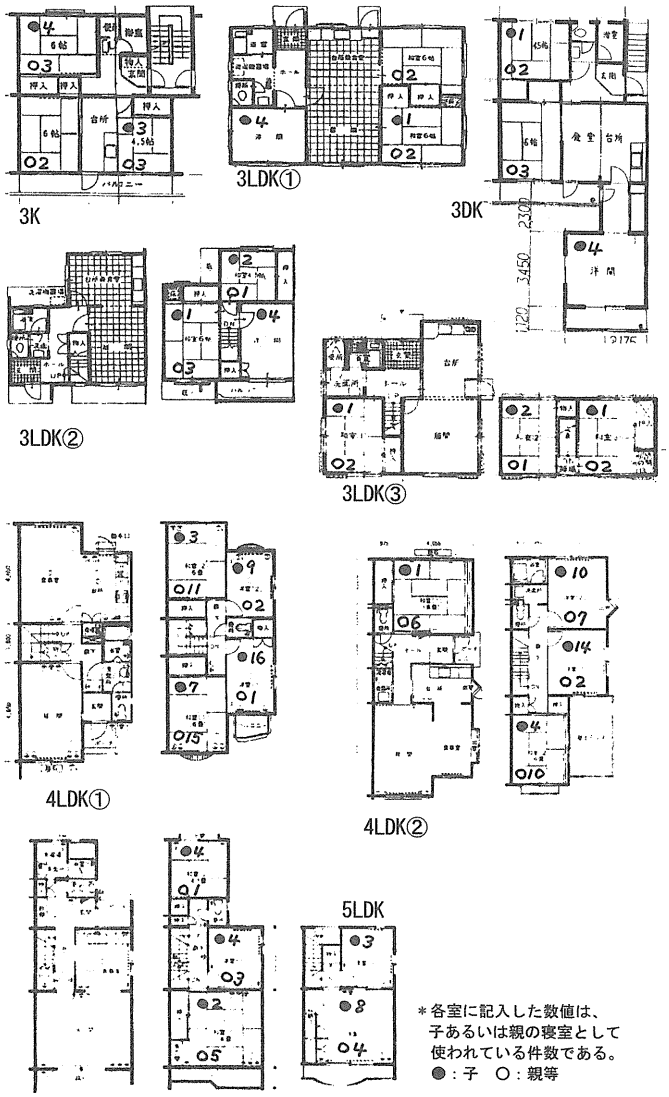

図 3-11 住戸タイプと寝室の位置

子どもの部屋の特徴は、洋室、独立している、日当たりがよいなどあり、親の寝室は、和室、日当たりがよい、台所や居間に近いなどである。

3.6.4 住戸タイプと親の満足度

住戸タイプ別に「満足」と答えた割合をみると、3K では 3 割、3LDK では 2～4 割、4LDK, 5LDK では 5～7 割弱、増築 4LDK, 5LDK では 8～9 割へと、面積や居室数が増えるほど概ね満足度が高まる（**図 3-12**）。プランとの関係をみると、3LDK では②の、4LDK では①の満足度が相対的に低い。寝室として使える居室が 2 階に集中しており、親子間のプライバシーや音の問題が生じやすいためと思われる。逆に、南側の部屋が離れていて独立性が保てる 3DK では、広くはないが満足度が高い。また、増改築タイプでは、要望が実現したためか満足度が高い。

満足度と住戸面積とを勘案して、住戸タイプを 3K、3DK・3LDK、4LDK・5LDK、増築 4LDK･5LDK の 4 つに分け、子の協力の有無別に満足度をみると、面積が狭くても協力があれば満足度は高く、逆に面積が大きいと協力がなくても満足度は高い。住戸の広さや居室数と、家事などへの協力とは補完関係にあるといえる（**図 3-13**）。

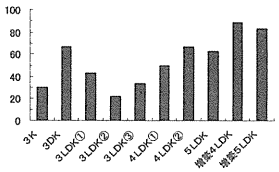

図 3-12 住戸別満足の割合

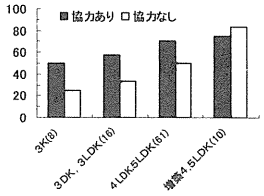

図 3-13 住戸別協力有無別満足の割合

4．成人と親との同居生活実態と住要求(20 代後半～)

4.1 調査の対象と方法

前章では、子の年齢が上がると、親あるいは男性の子の満足度が下がるなど、結果に年齢や性別の影響がみられた。そこで、年齢との関係をより明確にとらえるために、可能な範囲で子の年齢を高く設定した[注5)]。また、子と親の意識に違いがあるか否かを把握するため、子と親とを 1 対 1 に対応させ、子への満足度や独り暮らしへの希望などの項目は、対象とした子に対する回答とした。

調査対象は、愛知県と岐阜県の田園地域に居住する成人とその親とし、子または親に面接聞き取り調査を実施し、その親または子にアンケート調査を依頼する方法で行い、子 60 票、親 60 票の合計 120 票を得た。調査時期は 2005 年 7～10 月、調査項目は概ね前章と同じであり、間取りや寝室の位置等についても聞き取りを行った。

4.2 調査対象の属性

調査対象の属性は表 4-1 のとおりで、子のほとんどが有職者、親（母親）も、アルバイト等を含め 7 割が有職である。親の年代は前章よりも高くなり、子 20 代後半

33 例中 26 例が 50 代、30 代前半 16 例中 11 例が 60 代、30 代後半 11 例中 9 例が 60 代である。

住宅形式は、前章では RC 造集合住宅が多かったが、本章は木造住宅が主である。木造一戸建平屋 7 戸、同 2 階建 48 戸、集合住宅 5 戸である。住宅築年数は、10 年未満 5 戸、10 年～20 戸、20 年～17 戸、30 年～10 戸、40 年～8 戸である。

表 4-1　調査対象の属性

		フルタイム	アルバイト等	大学院生等	無職	計
女性子	20 代後半	17	5	1		23
	30 代前半	5	1			6
	30 代後半	4	1			5
	計	26	7	1	0	34
男性子	20 代後半	8	1	1		10
	30 代前半	8	2			10
	30 代後半	6				6
	計	22	3	1	0	26
親	母親	15	23		16	54
	父親	6 (5)				6
	計	21	23	0	16	60

＊子の女性 1 名、男性 2 名は 40 代である。　( ) 内は母親がいない事例数

子ども部屋は、男性は全員専用個室、女性は 4 例のみ共同室で、機器類の所有率は高く、TV は女性 84.3%、男性 88%、音響機器は女性 68.8%、男性 84%である。

4.3 生活の自立度と同居生活への協力度

前章までの結果から、自立の程度に差が出ると考えられる「食事の支度」「食事の片付け」「洗濯」「衣類管理」の 4 項目について、「全部自分でする」「自分ですることが多い」「親にしてもらうことが多い」「全部してもらう」の 4 段階に 4～1 点を充て、合計 12～16 点を自立度「高」、8～11 点を「中」、4～7 点を「低」とした。この自立度と、協力・分担している仕事の有無を組み合わせたものが**表 4-2** である。

全般に男女差が大きく、女性では「自立度が高く協力有り」「自立度が中程度で協力有り」を合わせると 55.9%である。何らかの協力をしている人は 7 割に上り、母親がいないため家事全般を担っている 4 人を除いても 6 割弱である。少ない事例数ではあるが、年代別にみると、30 代前半から後半へと自立度・協力度ともに高まる。

男性では、年代にかかわらず「自立度が低く協力無し」が 73%を占め、協力をしない人も 85%に上る。母親がいない 1 例は、20 代の長女が家事を協力している。

表 4-2　子の自立度と協力度

		自立度高 協力有り	高 無	中 有	中 無	低 有	低 無	計
女性	20 代後半	2 (1)	1	8 (2)	1	4	7	23
	30 代前半	3 (1)		1	1	1		6
	30 代後半	4		1				5
	計	9 (2)	1	10 (2)	2	5	7	34
男性	20 代後半			2		2	6	10
	30 代前半				1 (1)	1	8	10
	30 代後半					1	5	6
	計	0	0	2	3 (1)	4	19	26

( ) 内は母親がいない事例数

4.4 子と親の同居生活への満足度

同居生活の満足度を「大変満足」「満足」「どちらともいえない」「あまり満足していない」「満足していない」の 5 段階で問い、上位 2 段階を「満足」、他を「満足とはいえない」に分類して示す（**表 4-3**）。

20 代後半では、子・親ともに満足している例が半数を占めるが、30 代になると男女差があらわれる。30 代前半の女性では、子・親ともに満足している例が多いが、男性では、子は満足であるが親は満足とはいえない例が増える。30 代後半になると、女性では、親満足・子満足とはいえない例が多く、逆に男性では、子満足・親満足とはいえない例が多くなる。

表 4-3　子と親の同居生活の満足度

		子満足 親満足	子満足・親満足とはいえない	子満足とはいえない・親満足	子・親満足とはいえない	計
女性	20 代後半	13	6	3	1	23
	30 代前半	5		1		6
	30 代後半	1		3	1	5
	計	19	6	7	2	34
男性	20 代後半	5	3	2		10
	30 代前半	3	6	1		10
	30 代後半	1	4		1	6
	計	9	13	3	1	26

次に、親の満足度と子の自立度協力度との関係を、「自立度高・協力有」「自立度低・協力無」「中間（それら以外）」に分けて示す（**表 4-4**）。

男女ともに子が 20 代の場合は「自立度低・協力無」であっても満足度は高い。30 代になると「自立度高・協力有」（女性に多い）では満足度は高いが、「自立度低・協力無」（男性に多い）では満足度は低い。20 代までは生活の世話をしても不満はないが、30 代になれば生活面の自立や協力をしてほしいとの意識が読みとれる。

表 4-4　子の自立・協力度別にみた親の満足度

		満足	どちらともいえない	不満	計
女性	高・有	7 (1)	1 (1)	1	9 (2)
	中間	15 (11)	3 (3)		18 (14)
	低・無	4 (4)	2	1 (1)	7 (5)
	計	26 (16)	6 (4)	2 (1)	34 (21)
男性	高・有				0
	中間	5 (3)	1 (1)	1	7 (4)
	低・無	5 (4)	7 (2)	7	19 (6)
	計	10 (7)	8 (3)	8	26 (10)

( ) 内は 20 才代後半の子の数

4.5 独り暮らしへの意識

4.5.1 独り暮らしをしない理由

女性では、「経済的余裕無い」「お金を貯めたい」「趣味・旅行したい」など経済面が主である。「生活面の世話をしてもらえる」も多いが、これは 20 代後半の対象者が多い影響かと思われる（**図 4-1**）。「その他」12 例は、「親が望む」7 例「祖父の介護」1 例「家族の経済事情」1 例など、家族の望みや家庭事情である。

男性では「経済的余裕無い」は少なく、「お金を貯めたい」「生活面の世話をしてもらえる」が主である。独り暮らしを必ずしも望まない人では「独り暮らしをする理由がない」も多い。

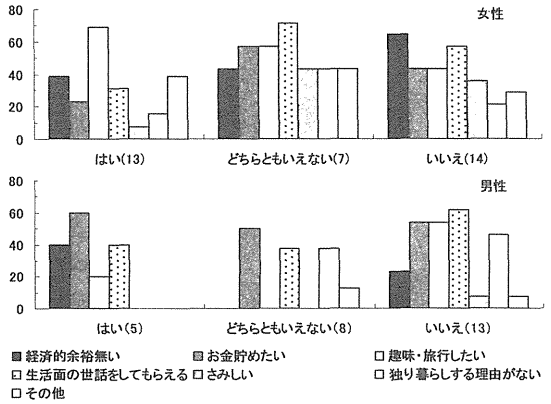

図 4-1　独り暮らし希望有無別の独り暮らしをしない理由

4.5.2 子と親の独り暮らしへの意識

子の場合、女性では各年代ともに「したい」と「したくない」が同程度あるが、男性では 30 代になると「したくない」が多くなる（**表 4-5**）。

親の場合、女性の子では、「してほしい」よりも「してほしくない」方が多い傾向があり、「どちらともいえない」も 23 例(67.6%)と多い。男性の子では逆に「してほしい」が多く、これは30代になると顕著である。

子と親の意識を重ねてみると、子よりも親の方が独り暮らしを望む傾向にあるものは(網掛け部分)、女性の子 34 例中 10 例(29.4%)、男性の子 26 例中 15 例(57.7%)である。男性の場合は、子「したくない」親「してほしい」と意識が食い違う例も 7 例ある。

表 4-5　子と親の独り暮らしへの意識

子の意識		○			△			×			
親の意識		○	△	×	○	△	×	○	△	×	計
女性	20 代後半	1	6	1		3	2	2	5	3	23
	30 代前半		2			1	1		2		6
	30 代後半		3						1	1	5
	計	1	11	1	0	4	3	2	8	4	34
男性	20 代後半		3	1	2	1	1		2		10
	30 代前半	1				1	1	4	2	1	10
	30 代後半				1		1	3	1		6
	計	1	3	1	3	2	3	7	5	1	26

○したい・してほしい　△どちらともいえない　×したくない・してほしくない

4.5.3 自由記述にみる親の意識

独り暮らしを「してほしい」は、特に男性 30 代の子を持つ親に多く、「世話の負担が大きい」「子の出す音が気になる」の二つが主たる理由である（**表 4-6**）。その他では、「年齢的にも経済的にも自立できる時期」「生活リズムが違う」などが挙げられている。

「してほしくない」は女性の子を持つ親に多く、20 代では「いないと寂しくなる」「いてくれてうれしい」など子との生活を楽しむ意見や、「女の独り暮らしは不安」「子のことが把握できる」など独り暮らしを案じる意見がみられる。30 代では「助かる」が 2 例あり、子が親の支えになっている様子がうかがえる。

「どちらでもよい」では、男女ともに「本人に任せる」が最も多いが、「してほしい」寄りの意見と、「してほしくない」寄りの意見とが混在していることも特徴である。「してほしい」寄りの意見は、子の将来のために自立を望む（女性の子に多い）、世話に手がかかる・生活リズムが違う・生活音が気になる（男性の子に多い）などである。「してほしくない」寄りの意見は、協力してくれるので助かる・家の中が明るい・警備上心配（女性の子に多い）などである。

表 4-6　独り暮らしについての親の意見

	理由	計	a	b	c	A	B	C
してほしい	世話をしたくない。家事の負担が大きい	6	1				3	2
	子の出す音が気になる	6				1	3	2
	自立についていろいろ学んでほしい	3	2			1		
	自立すべき時期（年齢）である	2					2	
	経済的に自立できる	3				1	2	
	親と子の生活リズムが違う	1						1
	孫がいて家の中が騒がしいのでかわいそう	1				1		
どちらでもよい	本人の意思に任せる	15	6	1	2	2	3	1
	将来のことを考えると自立すべきかと思う	5	4			1		
	自立できていないので子の将来に不安	3			3			
	独り暮らしをすると経済面でしっかりする	1	1					
	子が同居していると不経済である	1	1					
	独り暮らしできる年齢である	1	1					
	時期が来たら家を出る約束になっている	1		1				
	生活面で自立していないため手がかかる	2					2	
	親と子の生活リズムが違う	2		1			1	
	子の出す音が気になる	1				1		
	長男の嫁と同居しているため	1	1					
	独り暮らしは警備上の心配がある	1	1					
	同居していると家の中が明るく楽しい	1	1					
	生活面で自立しているため手がかからない	2		1			1	
	家のことを協力してくれるので助かる	4	1	2			1	
	助けてもらえて有り難いが子に負担がかかる	1			1			
してほしくない	子が出ていくと寂しくなる	2	2					
	独り暮らししていたが帰ってくれてうれしい	1	1					
	同居していると子のことが把握できる	2	1				1	
	家のことをいろいろ覚えてほしい	1	1					
	家を出るとわがままになる	1	1					
	独り暮らしは経済的に無駄が多い	1				1		
	女性の一人暮らしは心配	1	1					
	同居していても負担ではない	1				1		
	子がいてくれると助かることが多い	3		1	1			1
	本人が同居を望むならそれでよい	1					1	

a:女 20 代後半、b:女 30 代前半、c:女 30 代後半～
A:男 20 代後半、B:男 30 代前半、C:男 30 代後半～

4.6 同居生活の不便な点、気遣う点

同居生活を行う上で不便な点や気遣う点をみると、トイレでは、1 箇所設置 26 例中 22 例（84.6%）で「使用時間が重なる」があり、2 箇所以上の場合は不便だとの回答はほとんどない（**図 4-2**）。風呂では、一箇所設置 56 例中 26 例（46.4%）で「使用時間が重なる」「もう一つお風呂がほしい」「シャワー室がほしい」などと回答し、洗面所では、一箇所設置 40 例中 22 例（55%）で「数が少ない・使用時間が重なる」、14 例（35%）で「脱衣所と分けたい」との回答があり、トイレ、風呂、洗面所ともに、1 箇所では使用時間の重複など不便点が多いことがわかる。台所では、家事協力と関連する「複数では使いにくい」が 60 例中 17 例（28.3%）あった。収納では、男性よりも女性の方が不便を多く感じている。

音については、「気になる」「気遣う」ともに多く、木造住宅では上階の音等が響きやすいためと思われる。女性の子では、子と親の回答にあまり差はないが、男性の子では、子よりも親の方が音を気にしており、「音が漏れてきて気になる」は 85%に上る。生活音については、男性の子の影響が大きいといえる。

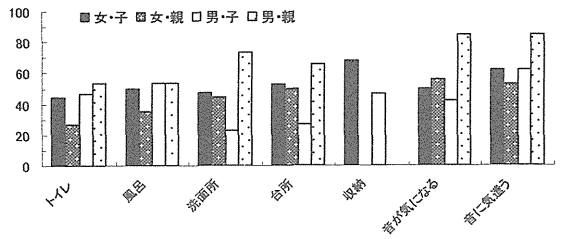

図 4-2 同居生活の不便点・気遣う点

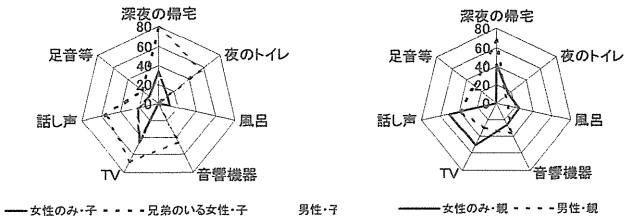

図 4-3 気になる音の種類

4.7 気になる音の種類と間取り

4.7.1 気になる音の種類

前節の結果をふまえ、ここでは、調査対象世帯を男性の子（兄弟）がいるか否かによって分類して、気になる音の有無と種類をみてみる。

「気になる音あり」の割合は、兄弟のいない女性 21 例中 9 例（42.9%）、兄弟のいる女性 13 例中 9 例（60.2%）、男性の子 26 例中 11 例（42.3%）であり、兄弟のいる女性の場合に音が気になる割合が高い。親については、女性の子のみの親 21 例中 12 例（57.1%）、男性の子がいる親 39 例中 31 例（79.5%）といずれも高いが、特に男性の子の場合に顕著である。

音が気になる人について音の種類をみると、兄弟のいない女性や、男性の場合では種類が少ないが、兄弟のいる女性では多く、「深夜の帰宅」77.8%、「TV」66.7%、「夜のトイレ」「話し声(以下いずれも特に電話)」55.5%、「音響機器」44.4%などである（**図 4-3**）。

親では、子が女性のみの場合、「TV」「話し声」50%、「深夜の帰宅」41.7%、男性の子がいる場合は、やはり「深夜の帰宅」が 67.7%と最も多く（帰宅時の車の音、車庫のシャッター音、玄関扉の音なども含まれる）、「話し声」38.7%、「音響機器」35.5%、「TV」29%、子が女性のみの場合にはゼロであった「足音等（ドアの開閉音、階段を上る音、上階からの足音など）」が 29%あることも特徴である。男女の体格の違いや行動様式の違いが影響しているものと思われる。

男性の場合、仕事の関係等で帰宅が深夜になる場合も多く、生活時間の違いとそれに伴う生活音に、本人は気遣いつつも親や姉妹は気になっている様子がうかがえる。自室の音響機器の保有率が高いこと、親の年代が 60 代中心と高いことも一因であろう。親の意見の一例として、「生活リズムが違いすぎる。息子の出す音は年寄りには耐えられない。音響機器の重低音、子ども部屋のドアが開いている際の電話の話声、笑い声、友達が来た時の話声等。二階のどこを歩いていても音が響く」（男性 30 代後半）、「父親の寝室の真上が長男の部屋なので、足音がうるさいなどといったことが原因でけんかになる。次男は深夜の帰宅が多く収納を挟んでいても隣の母親の部屋に音が聞こえてくる」（男性 30 代前半）などである。

4.7.2 気になる音と間取りとの関係

音が気になるとの回答が多かった親の場合について、間取りとの関係をとらえてみる。

生活音との関連から、「子と親の部屋が隣接または近接する」「親の寝室の真上に子の部屋がある」「子が帰宅して自室に行くときに親の寝室近くを通る」「関連無し」の４つに分けて[注6)]、気になる音の有無と種類をみたものが**表 4-7** である。

女性のみの場合、「近接」では 9 例中 6 例、「真上」「近くを通る」では 2 例とも、気になる音有りとの回答である。「真上」のうち 1 例では子の部屋を 2 階に移す改築により、以前には気になっていた話し声は聞こえなくなったとのことである。「関連無し」では 8 例中 6 例が「気になる音無し」である。

男性の子がいる場合、「近接」では、「気になる音無し」が 19 例中 5 例あるが、このうち 3 例は音対策を施したもので、全室の壁と 2 階床部分の防音工事 2 例、上階の音を避けるための寝室増築 1 例である。子ども部屋あるいは祖父母の部屋のみ防音工事を施した各 1 例では、深夜の帰宅や機器音、足音等がまだ気になっている。また、生活時間の違いから防音工事を予定しているものが 1 例ある。次に「真上」では、7 例中 2 例が「気になる音無し」であるが、うち 1 例は全室の壁と 2 階床部分に防音工事を施している。「近くを通る」のうち 1 例では、隣室の音が気になるので親の寝室を玄関横の 1 階和室に変更したが、深夜の帰宅はまだ気になっており、もう 1 例では、次男と同居中であるが長男も家に戻る予定なので防音工事をする予定である。また、間取り上「関連無し」でも、7 例中 4 例が「気になる音有り」である。

男性の子がいる場合には、間取りに関わらず全般に音の悩みが多く、防音工事や増築などの対策を講じているもの(7 例)、防音工事を予定しているもの(2 例)もある。

表 4-7 気になる音と間取りとの関係（親の場合）

			深夜の帰宅	機器・TV	話声・足音等	無し
女性のみ	子の部屋と近接	9	3	3	3	3
	子の部屋が真上	2	1	1 (1)	1	
	寝室近くを通る	2	1	1	2	
	関連無し	8	1	1		6
	計	21	5	6	6	9
男性含む	子の部屋と近接	19	11 (2) [1]	10 (1) [1]	8 (1) [1]	5 (3)
	子の部屋が真上	7	4	4	3	2 (1)
	寝室近くを通る	6	3 (1) [1]	1	5 [1]	
	関連無し	7	3	1	1	3
	計	39	21 (3) [2]	16 (1) [1]	17 (1) [2]	10 (4)

( )内は防音工事・増築など音対策の事例数　[ ]内は防音工事の予定事例数

5. 生活の自立と家庭教育

5.1 調査の対象と方法

生活面の自立度や協力度と、生活に関する家庭での教育との関連をとらえてみる。

調査対象は、愛知県および岐阜県内で親と同居する成人（大学卒業相当年齢である 22 才以上とする）およびその親とし、調査票を手渡し回収する方法により、子 74 票、親 74 票、計 148 票を得た。調査時期は 2006 年 9～10 月、主な質問項目は、衣・食・住生活に関する家庭教育、自立や協力の程度、それらへの意識などである。

対象者の属性は**表 5-1** のとおりで、子では女性が多く 20 才代が中心、親はほとんどが母親である。

表 5-1　調査対象の属性

		フルタイム	アルバイト等	無職	不明	計
女性	20 代前半	18	1	2	2	23
	20 代後半	16	3		4	22
	30 代	1	2	1		4
	計	35	6	3	6	49
男性	20 代前半	10				10
	20 代後半	8			1	9
	30 代	6				6
	計	24	0	0	1	25
親	母親	21	21	15	12	69
	父親	3 (3)		1	1	5
	計	24	21	16	13	74

（ ）内は母親がいない事例数

5.2 生活面の自立

衣・食・住生活について、「全部自分」「ほぼ自分」「ほぼ親(子が一部協力していることを意味する)」「全部親」がするといった 4 段階で問うた。「全部自分」は、母親がいないため家事全般を担っている例を除いて極めて少ないため、「ほぼ自分」と合わせて示す（**図 5-1**）。男女ともに、親への依存度は高いが、自室の掃除などの住生活面は、衣や食に比べてやや依存度が低い。衣生活と食生活では、男性よりも女性の方が依存度は低い。

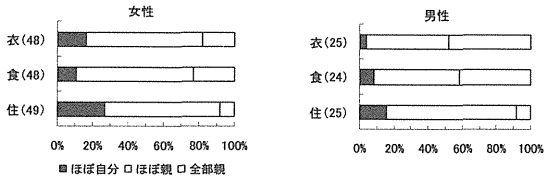

図 5-1 生活面の自立度

5.3 衣・食・住生活の教育度

生活面の教育度を、衣生活 6 項目、食生活 8 項目、住生活 7 項について[注7]、「一人でできるくらい教えた(教わった)」「数回教えた(教えられた)」「教えていない(教わっていない)」の 3 段階で問い、各項目の計を示す（**図 5-2**）。なお、子では、親以外にも、学校で教えられたり、自分で学んだりした場合も含まれる。

全般に男性よりも女性の方が親子ともに教育度が高い。女性の親では、衣食住とも「一人でできるくらい教えた」5 割弱、子では、「一人でできるくらい教わった」衣 85.5%、食 73.2%、住 67.6%で、親以外からも多くを学んでおり、「教わっていない」はほとんどない。

男性の親では、衣食住とも「一人でできるくらい教えた」3 割前後、子では「一人でできるくらい教わった」衣 47.4%、食 64.5%、住 37.1%で、女性に比べると親以外から学ぶ機会は少なく、「教わっていない」も多い。

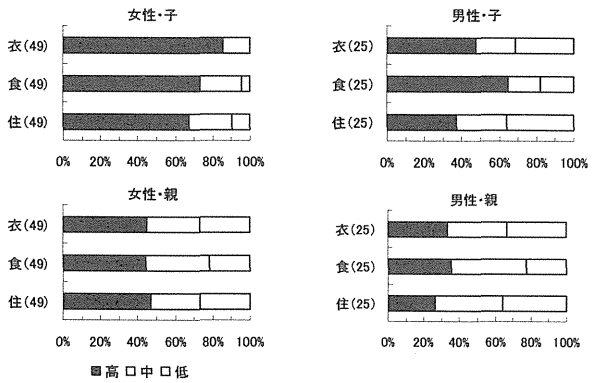

図 5-2 生活面の教育度

5.4 自立度と教育度

衣食住生活について、「全部自分」「ほぼ自分」「ほぼ親(子が一部協力)」「全部親」の 4 段階に 3～0 点を充て、合計 5 点以上を自立度「高」、3～4 点を「中」、2 点以下を「低」とした。教育度では、衣食住の 21 項目について、「一人でできるくらい教えた(教わった)」「数回教えた(教えられた)」「教えていない(教わっていない)」の 3 段階に 2～0 点を充て、親子の回答を合計した数値(84 点満点)により、64 点以上を「高」、63～43 点を「中」、42 点以下を「低」とした。

この指標による自立度では、女性は「高」24.5%、「中」32.7%で 6 割を占めるのに対して、男性は「高」4.2%（母親がいないため家事を担っている 1 例のみ）「中」25%、「低」が 7 割を占めている（**表 5-2**）。教育度でも、女性は「高」49%「中」32.7%に対して、男性は「中」41.7%「低」37.5%と低い。また、男女ともに、教育度と自立度には関連がみられ、教育度「高」の 29 例では自立度「高」と「中」が 69%を占めるが、教育度「低」の 17 例では自立度「低」が 82%を占める。

これらの結果から、男性では、親もあまり教えておらず、自ら学ぶ機会も少ないままに、生活面の自立や協力の機会を逸して成人する人が多いことが推察される。

表 5-2　教育度および自立度

教育度		高			中			低			
自立度		高	中	低	高	中	低	高	中	低	計
女性	20 代前半	2 (1)	6	2	1	2	6		1	3	23
	20 代後半	4 (1)	4	2	4	1	2	1		3	21
	30 代		2	2							4
	計	6 (2)	12	6	5	3	8	1	1	6	49
男性	20 代前半			1		2	3			4	10
	20 代後半		1	2			2			3	8
	30 代	1 (1)				2	1		1	1	6
	計	1 (1)	1	3		4	6		1	8	24

（ ）内は母親がいない事例数　＊自立度が不明の男女 20 代各 1 例は除く

5.5 家庭教育についての親と子の意見

衣食住の様々な面について、教えた理由、教えなかった理由、それらへの意見を自由記述で問うた。

教えた理由では、男女共通して「将来独り立ちした時に困らないように」が最も多く、「生活の基本なので当たり前」「協力してもらえるように（親が留守等の時にも困らないように）」などである（**表 5-3**）。女性では、家事の担い手として「結婚しても困らないように」「女の子だから」などの回答もあった。

教えてよかった点は、女性では「一通りできるようになった」が多く、男女共通では「親が不在や病気の時など助けてもらえる」が多い。

表 5-3　教えた理由、教えてよかった点（親）

教えた理由	女	男	教えてよかった点	女	男
将来困らないように	15	10	一通りできる	7	1
結婚しても困らないように	6		結婚しても困らない	2	
一人暮らしするので	2		一人暮らしができた	5	1
協力してもらえるように	6	2	必要な時助けてくれる	14	8
生活の基本なので当たり前	4	2	好き嫌いなく食べる	3	3
女の子だから	2		その他	3	1
栄養をよい食事をするため	2	1	特になし	2	1
無駄をなくしモノを大切に	1	1	未記入	15	7
その他	4	1	計	49	25
特になし	2	4			
未記入	5	4			
計	49	25			

教えなかった理由では、必要とは思いながらも「忙しくて教える時間がなく機会を逸してしまった」との回答が女性の子の親に多い（**表 5-4**）。男女共通では、「親の様子を見たりして自然に覚えるものだから」「特に教えなくても困らない」など、意識的な家庭教育はあまり必要ないとの意見がみられた。男性では「男の子だから教えていない」との回答もあった。

教えてこなかったことに対して現在どう思っているかとの問いには、教えることに積極性がみられなかった男性の子の場合も含めて、「教えればよかった、後悔している」が最も多く、「これから覚えてほしい」など、生活面の能力を身につけてほしいとの考えがうかがえる。なお、「特に問題なし」のうち男女各１例は、母親がいないので家事全般を担っており、「必要になればできる」のうち男女各１例は、一人暮らし経験がある。

表 5-4　教えなかった理由、教えなかったことへの意見（親）

教えなかった理由	女	男	どう思うか	女	男
教える時間がなかった	8		教えればよかった	10	7
自然に覚えるものなので	7	5	これから覚えてほしい	3	1
学校で教わるので	2		自分で覚えてほしい	3	2
教えても子がしないので	2	1	本人にやる気がない	2	
男の子だから		2	必要になればできる	4	2
自分自身家事が苦手	2		特に問題ない	3	1
自分で全部してしまった	1	1	特になし	1	
教えなくても困らない	4	4	未記入	23	12
特になし	6	3	計	49	25
未記入	17	9			
計	49	25			

子との同居生活がいつまで続くと思うかの問いには、20 代の子では男女ともに「結婚まで」あるいは「30 才まで」と考えている親が多いが、30 代の子になると、ほとんどが「わからない」との答えであった（**表 5-5**）。

表 5-5　同居生活が続くと思う時期（親）

		結婚まで	30 才まで	25 才まで	40 才まで	ずっと	わからない	計
女性	20 代前半	１１	3	3			6	２３
	20 代後半	7	6			2	7	２２
	30 代						4	4
	計	１８	9	3		2	１７	４９
男性	20 代前半	3	2	1		1	3	１０
	20 代後半	3	2			1	3	9
	30 代				1		5	6
	計	6	4	1	1	2	１１	２５

子についても、生活面について今後どのようにありたいかを記述してもらったところ、女性では、生活面の自立度を高めたい、家族を助けたいとの意見が多いが、男性では記述自体が少なく、協力したいとの意見も少ないなど、生活面の自立への関心が薄い様子がうかがえる（**表 5-6**）。

表 5-6　子の意見

	女	男
もっと自立できるようになりたい	１２	2
一人暮らしして自立したい	5	3
結婚して自立したい	1	1
家事の協力をして親を助けたい	9	1
料理ができるようになりたい	4	2
今のままでよい	8	5
特になし	2	1
不明	8	１０
計	４９	２５

６．まとめ

成人同居期の暮らしの実態や住生活上の問題点・要望などをとらえるために 4 つの調査を行った結果、以下のような知見を得た。

①子の自室

子は概ね自室を持ち、TV や音響機器も保有している。自室への主たる要望は、6 畳よりも広い部屋で、収納も十分あり、独立性（プライバシー）を保つことができ、TV 音響機器、電話の話し声などの音が漏れないことである。

②子の生活面の自立

自室の掃除や起床などを含む生活全般では、20 代よりも 30 代になると自立度は高まるが、食事の支度や片付け、洗濯や衣類管理などでは男女差があり、女性は 30 代になると高まるが、男性は低いままの人が多い。また、自立度が高いと家事など同居生活への協力度も高く、逆に自立度が低いと協力度も低い。

③同居生活の不便点・気遣う点

不便点では、トイレ・洗面所・風呂が一箇所の場合に、「使用時間が重なる」「シャワー室がほしい」「脱衣所と分けたい」などの意見が多く、台所では、「複数では使用しにくい」との意見があった。気遣う点では、生活音への回答が子・親ともに多く、互いに気遣いつつ、気にもなっている様子がうかがえる。

④気になる音の種類

夜遅くの音が特に気になっており、深夜の帰宅、電話等の話し声、TV や音響機器、トイレや風呂等水回りの音、足音などである。これは RC 集合住宅よりも木造住

宅に顕著である。

木造住宅では、男性の子がいる場合に、親や姉妹が気になる音の種類を多く挙げている。親の寝室と子の部屋が隣接もしくは近接している、子の部屋が親の寝室の真上にあるなど、間取りの影響も大きい。男性の子がいる場合には、壁や床の防音工事、寝室の増築や移動などによって生活音を解決している例もある。

⑤独り暮らし－子の意識

20 代では男女ともに 4 割程度が独り暮らしを望んでいる。30 代男性では調査によって結果が分かれ、3 章では希望が多くなり、4 章では少なくなった。30 代男性では独立への意識が揺れているとも考えられる。

独り暮らしをしていない理由では、女性は経済面が主であるが、親が望むなど家庭事情も多いこと、男性では「生活の世話をしてもらえる」が多いことが特徴である。

⑥独り暮らし－親の意識

独り暮らしを望む親は、女性の子よりも男性の子、男性の子では 20 代よりも 30 代の場合に多い。4 章の結果では、30 代男性の場合、子よりも親の方が独り暮らしを望む傾向にある例が多かった。

独り暮らしをしてほしい理由は、「本人の自立のため」「世話が大変」「生活リズムが違う」「子の出す音」などが主であり、してほしくない理由は、「子がいないと寂しい」「子がいると楽しい」「何かの時に助かる」などが主である。

⑦同居生活の満足度

子の場合、20 代～30 代前半では満足度は高いが、30 代後半になると、男性は満足であるが女性は満足とはいえない例が多くなる。親の場合、子が 20 代では男女ともに満足度は高いが、子が男性 30 代の場合や、20 代でも 2 人いる場合には満足度は低くなる。

親の満足度と家事などの協力との関係では、協力があれば年齢や性別にかかわらず満足度は高い。また、住まいの広さについては、狭くても協力があれば満足度は高く、広ければ協力がなくても満足度は高いなど、住まいの広さと協力の有無とに補完関係がみられる。間取りとの関係では、子の部屋と親の寝室とができるだけ分離できる場合に満足度が高い。

⑧生活の自立と家庭教育

生活面での教育では、女性の子は、家庭でも教えられ自ら学ぶ機会も多く、親は子の自立や協力を評価し、子も自立や協力の意欲を持っている場合が多い。男性の子では、親も教えようとの意識が薄く、自ら学ぶ機会も少ないままに成長してきた様子がうかがえ、自立や協力の意欲も女性に比べると低い。

⑨全体のまとめ

成人した子と親がともに暮らす成人同居期の暮らしの実態を生活面の自立という視点からとらえてきた結果、「生活面の世話」「生活音」の二つが主たる問題であることがわかった。これは、子が 20 代よりも 30 代の場合に一層顕在化し、男性の子では、高齢化する親が、子の生活の世話、生活リズムの違い、生活音に悩み、女性の子では、むしろ親が子を頼りにする様子が浮かび上がった。

社会変化の中で出現した「成人同居期」の暮らしには、子・親、男・女ともに生活面の自立能力を身につけ、互いに協力共同する姿勢が求められ、自立への意欲の向上と教育機会の増加が望まれる。住まいでは、子と親の部屋の適度な距離と独立性、防音性能、トイレ・洗面・風呂(シャワー室)の複数設置などの工夫が必要である。

＜注＞

1) 文献 1 ではシングル化する社会状況が論じられ、文献 2 では子の親への依存的状況が、さらに文献 3 では高齢化する親が子に依存する傾向が指摘されている。
2) 成長期の子どもと住まいについては、例えば文献 4～6 において様々な見解が展開されている。
3) 代表的なものとして、文献 7～10 を挙げる。
4) いずれの調査においても、特定の個人ではなく、同居生活による音全般が気になるかどうかを問うている。
5) 親と同居する 30 代の成人は対象探しが困難であったため、女性は 20 代後半が多い結果となった。
6) 子が複数いて部屋の条件が重なる場合は、まずは男性の子の部屋、次いで条件の厳しい部屋を優先した。
7) 衣：洗濯機, 洗剤, 洗濯表示, 干し方, たたみ方, アイロン、食：食品見分け, 保管, 包丁, 炊飯, 調理, 食品表示, 食器洗い, 片付け、住：部屋・風呂・トイレ・台所の掃除, 掃除機, ゴミ分別, ゴミ出

＜参考文献＞

1) 伊田広行『シングル化する日本』, 洋泉社新書, 2003
2) 山田昌弘『パラサイト・シングルの時代』, ちくま新書, 1999
3) 山田昌弘『パラサイト社会のゆくえ』, ちくま新書, 2004
4) 「特集・子ども室」『すまいろん』15 号, 住宅総合研究財団, 1990
5) 「特集・子どもと住まい」『住宅』52 号, 日本住宅協会、2003
6) 松原小夜子「大正デモクラシー期の子どもの教育と子ども室―雑誌記事より―」『生活文化史』46 号, pp. 84～94, 日本生活文化史学会, 2004
7) 白波瀬佐和子他「「世帯内単身者に関する実態調査」の概要」,『厚生』, 2001. 7, pp. 22～27, (財)人口問題研究所
8) 北村安樹子「成人未婚者の離家と親子関係」『LDI report』, 2001. 7, pp. 22～43, ライフデザイン研究所
9) 田中慶子「「パラサイト・シングル」仮説の検証-NFR98 データの分析から」『家族関係学』 pp. 95～104, 日本家政学会家族関係学部会, 2003
10) 高坂康雅、戸田弘二「青年期における心理的自立Ⅲ」 北海道教育大学紀要. 教育科学編, pp. 17～30, 2006

＜研究協力者＞

野崎京子、山口優子、五島麻里、二村千央、飯田玲子、
北村知佐、西村美里、福井亜由美
いずれも椙山女学園大学学生(当時)

＜謝辞＞

本研究の調査を実施するにあたり、多くの方々にご協力いただきました。ここに感謝の意を表します。